

『#うそコンシェルジュ』（津村記久子著）を読んでみた。著者は、『君は永遠にそいつらより若い』で太宰治賞を受賞してデビュー。2009年「ポトスライムの舟」で芥川賞。

日常の困ったこと柄をやり過ごし、目の前の「今」を生き延びるための11篇の短編集。

パートをしながらひそかに漫画を描く女性や六年生なのに四年生の補習を受ける小学生、実家から盗んだ食器を割ってストレスを発散している女性（主人公も一緒になって食器を割ってストレスを発散）等が出てくる作品がある。

本書のタイトルになっている「嘘」についての作品が2編（「うそコンシェルジュ」）。「下手な嘘で依頼事を断るくらいなら、本当の理由で断る方が傷つかない」という言葉が印象的だ（そこまで嫌なのかと勘繰られてしまう）。採用試験の適性検査で「うそをついたことがありますか？」という質問に「いいえ」で答えると、どれだけ成績や印象がよくても落とされるって本当？

さて、大学のサークル（食生活や服装にまで口を出してくる先輩がいる）を抜きたい姪Sのため、うその辞める理由を考えてあげたことをきっかけに、「うそ請負人」として頼みにされる主人公のM。Sの大学の同級生であるT君からも自分の祖母のためにうまいうそのつき方を教えてほしいと依頼を受けてしまう。嘘をつくとも罪悪感は募るようだ。

続編「続うそコンシェルジュ」では、Mは職場の部長からも相談を持ちかけられる。部長の姪が参加しているトレッキング部の活動で体調を崩したことをきっかけに、妹（姪の母親）が顧問の先生を辞めさせよう（リコール運動）としている。うそを駆使して架空の人物まで作りあげ、妹の説得を試みるがうまくゆかない。さあどうする。

常日頃、ストレスを感じているとき、人はどうやってそれを紛らわすのか。本書を読めば、クスッと笑いながら、あらたな方略を一つゲットできるかもしれない。